



弘大農学部同窓会会報

第15号

平成6年8月20日 発行
発行 弘前大学農学部同窓会
TEL. 0172-36-2111
振替 盛岡4-564番
印刷 (株) 笹 軽印刷

農を学んだ者として

同窓会 副会長 今 哲 廣

「米価シーズン」という言葉が使われてから久しいが、それほど政府米価の決定方法がマンネリ化した現れとも思える。

ミニマムアクセスの受け入れや、「平成米騒動」とか言われる、'93米穀年度の米不足等々農業関係の話題には事欠かないこの頃である。

我々農業に直接、間接に係わる者として、また多少なりとも農学部と言うところで学んだ者として、「農」をめぐる問題については大いに関心を持ってもらいたいものである。

特に主食料について、内外価格差（円高が

高じるとますますそうだが）を解消すると称して、輸入の促進と自由な国際競争を主張する者が居るが、それでいいのか、国内生産はいらぬのか、どれくらい自給すればいいのか国内の農業は不



【卒業祝賀会で挨拶する今副会長】



品種：ふじ LAI調査のため葉を全部摘みとってある

要なのか、村や町に人が住まなくなってもいいのか、国民的な議論と合意が必要な時期ではないのか。

農業経営をする人よりも農業関連の産業に携わる人や農政に携わる人（応援団）の方が実入りが良い傾向もないわけではない昨今、農学同窓生としては十分心して、仕事をする必要があると思う。選手がずっこければ、応援団も不要になるのだから。

関連して、農という言葉、文字を軽視すべきではないと思う。

21世紀は食糧不足の時代と言うFAOの予測を見過ごしてはならない。

人間のエネルギーをどうするのか。産業のエネルギーをどうするのか。数十億年の地球の炭酸ガスが固定化された化石燃料を数百年で使い切って許されるのか。原子力の平和利用は許されないのか。

我々は、社会を支える者として農学を学んだ者として、関心を持つ義務があるのでは…と思う。

同窓生諸氏はどうお考えですか？



この頃の大学教官稼業

菊池 卓郎

二昔くらい前までは、大学教官といえば、給料は安いが上からの命令で動くこともなく、言いたいことを言いながら好きな研究に打ち込んでいけばよい、気楽な稼業と考えられていた。実際、研究費が少ないことを別とすれば、それは多分に本当であった。

しかし、この頃は事情が大きく変わった。その最たるものは、教官の研究業績の評価が厳しくなったことである。「最近どんな研究論文を発表したか」、「外国の学会へ何回行ったか」、「学会賞その他の賞をもらったか」等々の調査票が、年に何度もまわってくる。そして、業績評価が人事面にも研究費にもはねかえってくる。

国立大学の研究費は、教官数、学生数などに応じて大学に配布される「校費」の中から、中央経費を差引いたものが、一定のルールによって学科、講座に割り当てられる。昔は大部分の教官にとって、これが研究費のほとんどを占めていた。その額は少なかったが、何とかやりくりして過ごして来た。

しかし、最近文部省は上記の校費は極力抑えて、研究業績のすぐれたものに対して科学研究費その他の特別枠の財政的援助を与えるという方針を、年々強めてきている。また企

業等から研究費をもらうことも、おおいに奨励されるようになった。そして、こういう別枠の金を取って来ないと、研究を積極的に進めることが困難になってきているのである。

研究業績の評価を厳しくすることは、ある程度大切なこととは思うが、これがあまりに重視され、とくに論文数を拠り所にして論じられるようになると、これによって失われるものが大きいことを心配する。従来の大学では、のんびり暮している教官の存在が許された反面、一生かけた大きなテーマにじっくりと取組むことも可能であった。私もそのお蔭で、リンゴの整枝剪定という、研究対象としては把えどころをみつけにくい研究に打ち込むことができた。これこそが大学の良さだと思っている。これからの教官は、研究テーマを選ぶにあたって、毎年論文が書けるような研究ということが先に来て、独創的でスケールの大きい研究が育ちにくいのではないか。そうならないためには、どうすればよいのか。

大学教官が深刻に考えるべき問題だと思う。

追記1. 昨年の会報で「環境学部構想」について述べました。その後、大学改革はまず全学的にしっかりした教育方針を立てること（具体的には教養部廃止に伴う授業の実施・運

営形態、語学や情報科学の教育方法、具体的なカリキュラムの作成等々)が前提であるとの文部省の厳しい方針により、学部の組織改革については足踏み状態にありました。最近、この前提条件についてもかなり進展をみましたので、いよいよ学部改革の問題に入っていけそうな状況になりました。

昨年から同窓生の皆様からは、学部の名称を含めて、批判や御意見を多く頂いております。それらの点も十分考慮に入れながら、柔

軟で積極的な取り組みを進めていくつもりです。

2. 今年三月末に農学部の増築工事が完了。全体としてコの字型の校舎が完成しました。学生の化学実験室、育種学のバイテク施設、植物病理と昆虫の標本室、農業経済関係の書庫(移動式の書架を持ち、東北地方の大学の農経の書庫としては最大)などが新築部分に作られています。増築に伴って研究室の大規模な移動が行われ、飛地が解消し講座などのまとまりもよくなりました。

収穫祭の思い出

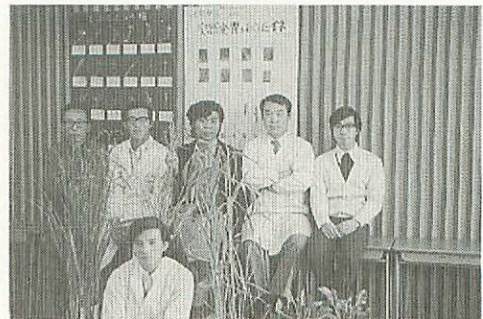
齋藤 健一

昭和41年1月弘前大学農学部に着任以来、早くも28年3か月経過し、この度3月末日付で停年退職いたしました。まさに「光陰矢の如し」と感ずる才月でした。大過なく退職できましたのは、ひとえに農学部教職員のみならず農学部同窓生各位の公私にわたる温かいご指導、ご支援の賜物によるものと深く感謝いたしております。紙面を拝借し、心より厚くお礼申し上げます。

同窓会幹事から投稿を依頼されましたので、思い出の一端を述べて、責を果したいと思っております。

40有余年前、大学時代の恩師から「農は国の基である」と教えられ、食糧不足の時代的背景もあったとは思いますが、農学を学ぶことに誇りと意義を感じていました。卒業後は希望した農林省北海道農業試験場に就職し、

てん菜(砂糖大根)の育種に従事しました。就職早々に開始された採種用母根の糖分調査が、モーターや母根からサンプルを効率よく抽出するサンプラーの回転などによる騒音に満ちた作業室でおこなわれます。この調査は10名程の関係者による流れ作業であり、中小企業工場での作業を思わせるものでした。また、自分勝手な行動が許されない、協調性を必要とする共同作業であったことに先ず驚きました。糖分調査が終ると、採種用母根の定植が始まります。トラックやライトバン型の自動車普及していなかった当時、採種用母根を積んだ馬車に乗った技官が隔離採種のため、一定距離(数百メートル)を保ちながら母根を定植して廻る作業は、現在では想像できない非効率的なものでした。母根定植が終ると直ちに試験圃場での播種が開始され、これら





一連の作業が終る5月中旬、桜花の下で酒を酌み交し、その年の研究計画が無事達成されることを祈るのが恒例でした。

これらの作業に先だって、研究室長から「圃場作業の際にはゲートルを着用し、地下足袋をはくように」と云われ、軍事教練の再来を連想しましたが、当時（昭和27年）としては、このスタイルは農業試験場で圃場作業をする際のトップモードでした。約6か月にわたり丹精して育てたてん菜は寒冷地作物であるが故に、その収穫は遅く、初雪が舞うような寒い10月中旬に開始されます。寒気に負けず、収穫・調査の共同作業を終えた11月下旬、労苦を共にした同僚と暖かいストーブを囲んで行なう収穫祭は忘れ難い思い出です。

弘前大学農学部学生自治会主催の伝統行事の1つである収穫祭が開始されたのは昭和28年とのことです。農学部同窓会が昭和60年に発行した「30年のあゆみ」の中に第1回収穫祭の祭壇に、学生が栽培・収穫したと思われる農作物が沢山飾られている写真を見つけた時「これが収穫祭の原点である」と教えているように感じました。

近年における工業生産による経済の著しい発展に伴ない、農業が斜陽化し、「工は国の基である」という認識が次第に強くなったことよって、収穫祭の目的や内容も次第に変わり、本来の姿が年々見失われつつあるように思われ残念でなりません。このような状況下で発生した平成5年度における、イネの全国的な冷害によるコメ不足、外国産コメの緊急輸入、闇米の値上りなどは大きな社会的問題となりました。この異常事態によって、人智でコン



トロール不可能な自然現象を再認識すると共に、農業・農学の意義と重要性が見直され、農業が一層振興されることを期待したいものです。

収穫祭（大学祭）で発表される学術的展示とその見学者が次第に減少してきたように感じられることも気になります。

収穫祭行事の一環である会食会での思い出は教室対抗の芸能（？）大会で演じられる寸劇です。学生の脚本・演出で、教官と学生が一体となって演ずる寸劇は、教室での研究テーマに関係するもの（例として育種学教室でとりあげたテーマを示すと、イネの一生、トウモロコシのヘテロシス、リンゴの自家不和合性、細胞融合などです）が多く、1、2年目学生に対する教室紹介であると共に、研究目的などを示唆するものが多いようでした。また、素人役者のユーモアやミスの多い演技で爆笑を誘うことも度々でした。このような寸劇は昭和53年頃から数年間継続され、応用昆虫学、植物病理学、果樹園芸学、育種学教室などが上位入賞を競い合っていたように記憶しています。このように、収穫祭で教官と学生が一緒になって寸劇を演じ、酒を酌み交し、一年間の労苦やストレスを解消し、英気を養うことも意義のあることでしょう。

農学部における収穫祭の変遷は教育改革（学科改組など）に伴う学生の自覚や認識の変化などによるものでしょう。第1回収穫祭で示された原点を想起し、「農は国の基」という認識に基づいて企画・実行されることを期待したいものです。

収穫祭の姿は実行する組織によって異なり

ますが、共通点は人智に驕ることなく自然の恵に感謝する心の表現ではなからうか。

話は変わりますが、久しぶりにお会いする同窓生との話題が履修科目の単位のことと及ぶと、教育の難しさを痛感します。これに懲りず、退職後も農学教育の一端をお手伝いする

ことになりましたので、今後ともよろしくご支援をお願いいたします。

末筆ながら弘前大学農学部同窓会のますますのご発展ならびに同窓会会員各位の一層のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

リレハンメル思い出

月 館 光 三

早いもので、私が弘前大学に転勤して以来12年の月日が夢のように経過した。あと2日で停年退官である。この間、多くの先輩、同僚、卒業生の皆さんからお世話をいただき、大過なく停年を迎えることができたことに対し、心からお礼申し上げたい。

さて、この12年間を通じて楽しかったこと、苦しかったことなど多くのことが思い出されるが、その一つとして昭和59年7月～9月の2か月間、ノルウェーを中心とした北欧への海外出張について述べることにする。

ところでこの文のテーマが、あのギターの名曲「アルハンブラの思い出」と似ていることから、何か感傷的な内容かと誤解される向きがあるかも知れないが、そうではなく今年2月に行われた冬季オリンピック大会がリレハンメルで行われたので、懐かしさのあまり当時の思い出を述べることにした。

私の主な目的は、ノルウェーにおけるクイッククレイの研究であり、国立ノルウェー農科大学のヨルゲンセン教授のお世話になった。滞在中、4泊5日の現地土質調査に2回同行させてもらったが、その中の一つがリレハンメル郊外であった。ここでは堆積したクイッククレイが、氷河の退化によって隆起した場所であり、リレハンメルの町が一望に見渡せる小高い丘であった。調査は、土の鋭敏比の測定と試料採取であった。鋭敏比とは土の不攪乱状態と、攪乱状態の時の土の強度の比を云う。北欧においてはこれをベーン試験機（現

場における剪断試験機）を用いていた。この調査では鋭敏比70～100という結果であった。これは攪乱することにより、土の強度が70分の一から100分の一に低下することであり、日本では到底考えられない数値である。ノルウェー中部リサにおけるクイッククレイの液状化災害は世界的に有名であるが、これはわずか1m高の盛土が起因して土の平衡が破れ、約30haの農地が液状化によって流失したのである。リサの鋭敏比は大きい値で150であったといわれている。



リレハンメル郊外にてヨルゲンセン教授と筆者

当時は、まさか10年後に冬季オリンピックが開催されるなど思いもよらなかったため、町の状況などあまり詳しく見たわけではないが、地方にあるごく普通の町との印象でしかなかった。クイッククレイ以外のことでただ一つの思い出は、私が作業服を着て夕方ホテルに行ったところ、ホテル側では怪しい外国人と見たのであろうか、なかなかわれわれを泊めてくれそうになかった。もちろんヨルゲンセン教授と支配人とはノルウェー語で話しているので、内容は全く分からないが、会話中ちらちらと向けられる私への視線から話の概要は伺い知ることができた。ヨルゲンセン教授の説得が上手だったのか、15分位でようやくOKが出てホッとしたものである。調査が終わってリレハンメル周辺を案内してもらった。その一つは、第2次世界大戦におけるソ連兵士の無名戦士の墓を見学した。私はそ

れまでソ連軍がノルウェーに入ったことを知らなかった。そして教授はつけ加えた。「日本人でこの墓にきたのは、あなたが最初でしょう」と。また森林の中に、高さ2m、幅5m位もある氷河が運搬した巨石に出会ったり、ただの観光旅行では経験できないいくつかのことがあった。

最近国際化が叫ばれており、多くの人々が海外旅行をしているようである。中には海外の名所古跡を「あそこも見た。ここも見た。」と自慢している人もいようであるが、私はこのようなことに賛成はできない。できれば短期間でもそこに住み着き、住民と接触してその国の長所と短所、そして日本人の長所、短所について考えることをお勧めしたい。「良き国際人とは」に対する回答は多くあろうが、「相手の立場に立って物事を考える人」というのが北欧を旅行した私の結論である。

平成6年度は農業土木学講座に谷口建教授、生物資源利用学講座に戸羽隆宏助教授、生産機械学講座に張樹槐助手、園芸農学講座に松山信彦助手が赴任されました。4人の先生方に自己紹介を兼ねて抱負を述べて下さるようお願いしましたところ、快く御寄稿して下さいました。



谷 口 建 農業土木学講座 教授

1945年北海道旭川市生まれ。岩手大学大学院農学研究科修士課程終了後、北海道産業短大に1年10ヵ月、専修大学北海道短大に23年余り勤務し、4月に東北の地にもどってきました。北海道の豪雪地域で過ごしましたので、冬の寒さと雪には耐えれますが、今年の夏の暑さには自信がありません。農村地域のライフラインである農道の配置計画と構造そして農村の生活環境整備について研究しています。農村地域の活性化が言われていますが、都市住民の農村に対する意識改革が大切であると考えています。岩木山や八甲田連峰の雄姿を眺めていると、落ちつきません。そろそろ山めぐりでも開始しようと思っています。どうぞよろしくお願いたします。



戸 羽 隆 宏 生物資源利用学講座 助教授

私は1975年3月に本学部園芸化学科を卒業致しました。同年4月に東北大学大学院農学研究科修士課程に進学しましたが、1976年6月に中途退学し、畜産物利用学講座(1992年4月学部改組により動物資源化学講座に名称変更)の助手として採用され、1994年3月までこの職にありました。この間、卒業研究を農産物利用学研究室の斎藤善一教

授のもとで行ったのをきっかけに、東北大学でも、「ラクトース分解酵素によるガラクトオリゴ糖（ビフィズス菌増殖因子として、現在では多くの食品に利用されています）の生成に関する研究」、「ケフィール粒中の乳酸菌に関する研究」、「乳酸菌が生産する多糖の機能性食品としての利用に関する研究」など、殆ど、酪農化学・微生物学の分野の仕事をして参りました。そして、本年4月1日付けで生物資源利用学講座に採用して頂きました。昨年の6月から弘前に来る直前の3月29日まで、ヘルシンキ大学に滞在し、「アシドフィルス菌の消化管定着機構に関する研究」を行ってまいりました。現在はこのテーマに最も興味を持っておりますが、生物資源利用学講座という畜産物のみならず、農産物ならびに園芸産物も研究対象にできる環境に恵まれたこと、また、いわゆる地方大学農学部は地域産業の振興に果たすべき役割を考え、いくつかの新たなテーマにも取り組みたいと考えております。地域に密着した研究の展開のために、同窓生の皆様の御指導と御協力をお願い申し上げます。



チャン シュー ファイ
張 樹 槐 生産機械学講座 助手

1962年中国河北省蠡県生まれ。1984年中国吉林工業大学自動車・トラクタ学部を卒業した後、1985年来日しました。その後北海道大学博士前・後期課程に入学したのを契機に、5年間の院生生活に没頭しました。大学院修了後、関西にある建設機械メーカーに約3年間勤務しましたが、大学生生活が懐かしく、今年1月弘前大学に赴任致しました。

大学院時代、運搬用車両の自動化、安全性向上に関して、ファジィ制御などの制御理論とメカトロ技術を駆使し、農作業の機械化、高能率化を目的とした研究に取り組んで来ました。これからは津軽の地域性を考え、リンゴ園作業の自動化、省力化に少しでも役立つ研究をして行きたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。



松山 信彦 園芸農学講座 助手

1965年長野市生まれ。東京、宮城鳴子で学生生活を送り、この度、弘前に着任致しました。生まれ育った町も城下町でしたので、伝統のある弘前で生活できますことは、自分にとって嬉しいことです。東北大学附属農場で過ごした大学院生時代は、我国の主要な畑土壌である黒ボク土を、その養分保持や酸性障害あるいはリン酸の可給性と窒素栄養等を大きく左右するコロイド組成によって類別し、栽培管理・土壌管理を合理的かつきめ細かに行うという、従来の作物学と土壌学の境界分野の研究に従事してまいりました。

去年の異常気象による史上まれにみる水稲の不作を考えますと、作物の本来の機能や目的を充分考慮し、常に生産現場を念頭においた研究の重要性を感じさせられます。青森県は津軽の水稲、三本木台地を中心とする南部の畑作がバランス良く栽培されており、これらの中から、寒冷地における水稲の安定省力、多収栽培や黒ボク土の特色を活かした畑作物の作付様式など作物分野の立場から、基礎的な部分を含めて、地域に立脚した研究を行って行きたいと思っております。

若輩ながらも弘前大学農学部の一員として頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。



福地先生



竹村事務長



卒業祝賀会

H. 6. 3. 23



城田先生

安藤先生



菊池農学部長



伊藤先生

森先生

沢村先生



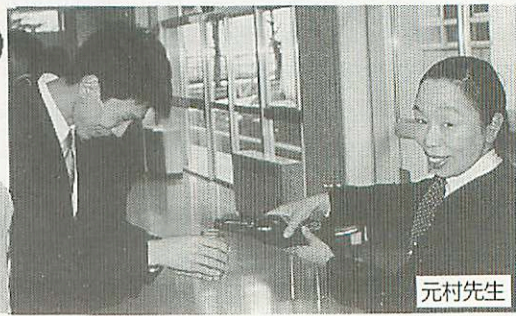
工藤先生



斉藤先生



中村先生



元村先生



弘前大学の印象

JSPS外国人特別研究員 李 世訪 (Li shi fang)

私は日本学術振興会 (JSPS) の援助で1993年の4月から1年間弘前大学農学部植物病理教室で研究生活を送りました。弘前大学に来るきっかけは、当時北大の助手であられた佐野輝男先生が2年間の米国留学後、弘前大学の助教授として赴任した事でした。

弘前に来る前に、北海道大学大学院農学研究所農学部の植物ウイルス、菌学教室で6年近く留学生活を送り、“果樹類及び園芸植物のウイルス及びウイルス病に関する研究”で93年3月に農学博士学位を取得しました。弘前大学での研究テーマは、果樹類に多発したウイルス病の遺伝子診断法の開発及び実用化が主な内容です。日本でのウイルス病に関する研究は、ホップのわい化ウイルス病、リンゴの銹果病及びびゅう果病、ナシの粗皮病及び窪み果病等で世界に注目されています。

実は今まで短期間の実験や研究材料の採集、学会の途中等で3回ほど弘前に来た事があります。短い期間でも弘前の人々が親切だと言う印象を受けました。この丸一年を通じてこの学生や先生方と一層理解を深めました。あっという間に一年たちましたが、弘前を離れる前に私の感想を皆さんに紹介させてもらいたいです。

私がはじめて日本に来たのは1987年10月7日でした。その時私は大学を卒業して間もなく、今の体重より25キロ以上少なく、子供の顔をしている23歳の青年でした。北海道に着いたばかりの頃は、英語 (日本語は第一外国語なので) も、学問の方もまた日本の習慣もわからなかったので、大変な一時期がありました。その期間は風邪を引き易く、中国で一度も車に酔った事がないのに私はスキーに行く途中激しい車酔いのため死にそうな体験もしました。こういう状況でしたから、気持ちは毎日いらいらして、特におちょこちょい

の私にとって研究の方面はどうなったかはいうまでもありません。

1992年の夏に、私は1カ月ほど弘前大学で博士課程の最後の実験を行いました。その一カ月には私にとって忘れがたい事がありました。私の誕生日は7月なので研究室の学生が Surprise Birthday Party をやってくれました。今まで家族には何回も誕生日をお祝いしてもらった事があります。しかし、日本に来てからこれは始めてでした。その頃教室の方々と一緒にとった写真を中国の実家に送ってから、間もなく返事が来ました。“君の今までとった写真はいつも厳しい顔をして、笑顔がないか、あっても不自然な瞬間的な笑顔であったりしましたが、弘前でとったこの何枚かの写真は本当に嬉しい顔をして、心からの笑いです” (原文は勿論中国語) と書いてありました。学振の特別研究員としての一年間では、学生の車に乗った回数は以前の約6年分より多いと言っても過言ではありません。2月14日のバレンタインデーに研究室の女子学生からチョコを貰った事も来日後始めての事でした。

北海道大学は旧帝大の一つとして、いろいろの面で弘前大学より上回っております。特に旧札幌農学校がその前身なので、農学部は他の学部よりもっと有名と言われており、留学生の人数も弘前大学よりはるかに多いです。留学生の数が多くなったので、回りが冷たくなって来たのでしょうか？ 或いは旧帝大のプライドがあるからなのでしょうか？ 留学生自身の適応性の問題もあるのでしょうか？ 一番先端的な実験設備があれば必ず立派な研究が出来るとは思いません。研究するためには設備も重要であるが、研究者の能力を充分発揮できる環境造りも重要ではないでしょうか。まして、人間は人間であり、機械と違ってコミュニケーションが必要と思います。海外で

勉強している留学生は言葉や習慣の違いで、普通の学生より強いストレスを受けている事をもっとたくさんの方々に理解してほしいと思います。いつか自分も日本を離れ外国に留学し、同じ立場に於かれる場合の状況を想像してください。日本に来た留学生が一日も早く日本での勉強生活に慣れるためには、回りの環境がとても大切である事を言いたいです。これからは弘前大学で勉強する外国人留学生の数も増えると思います。この場を借りて私は一人の先輩として、新しく弘前大学に留学に来た新入生の皆さんに私の助言を述べたいと思います。それは日本に来た以上、あんまり国籍や過去の歴史にこだわるよりも、自らもっと積極的に周りの環境に融けた方

が、あなたの留学生活をもっと充実にもっと楽しく過ごせるということです。

私はそろそろ弘前で生活も終わり、4月1日からは大津市にある宝酒造株式会社の生物学研究所に赴任する予定です。今の気持ちを申しますと本当に教室を出たくありません。教室の皆さんのお陰で私は楽しく充実した一年を送りました。きっと将来の懐かしい思い出になると確信しています。いつか琵琶湖で会いましょう。この場を借りて、受け入れて頂いた原田幸雄教授、佐野輝男助教授、藤田隆助手に感謝の意を表します。最後に弘前大学の今後の一層の発展と繁栄を心からお祈りします。

(1994年3月1日 記)

教官人事

退官

齋藤健一教授 (生物機能開発学講座)
月舘光三教授 (農業土木学講座)
篠邊三郎教授 (農業土木学講座)

昇任

川越信清教授 (農業土木学講座)
石川隆二助教授 (生物機能開発学講座)

青山正和助教授 (生物資源利用学講座)

新任

谷口 建教授 (農業土木学講座)
戸羽隆宏助教授 (生物資源利用学講座)
松山信彦助手 (園芸農学講座)
張 樹槐助手 (生産機械学講座)

支部だより

福島県支部 (わんどの会) 総会に参加して

齋藤 健 一

「わんどの会」第14回総会が平成5年11月12日、郡山市の郡山温泉で開催され、ご招待に承えて篠辺教官と私が参加しました。

総会は尾形 正氏の司会で境 隆会長の挨拶に始まり、尾形、佐々木正剛両幹事からの経過・会計報告に次いで、両教官が大学や農学部現状・将来構想などを報告しました。懇

親の部では新会員の自己紹介や再会を喜び合う会員の近況報告などで会は盛り上がり、尽きぬ話に夜の更けるのも忘れる程でした。翌朝、会員は互に再会を約し、別れを惜しみながら宿を後にしました。「わんどの会」の心温まる歓待は山海の珍味に勝るものでした。皆様のご厚情に心からお礼申し上げます。

話しは5年前の平成元年10月に溯りますが、昭和55年に発会した「わんどの会」の10周年を記念する第10回総会へのご招待を受け、工藤啓一教官と私が参加しました。会場は猪苗代町の翁島荘でした。私事ですが、父の母親が会津藩出身で、その兄が白虎隊の一員であったと聞いていましたので、初めて訪れる会津が私の故郷である思いで旅立ちました。当時の会長は育種学教室出身の松本 馨氏でしたので、初参加にもかかわらず、会には深い親しみを感じて出席しました。案にたがわず、和やかな雰囲気になった楽しい会合であったことを未だ忘れません。懇親会の中ばに、長尾鉄砲火薬店長の長尾八郎氏が10周年を記念して打上げた大輪の花火に景気づけられ、会はますます盛り上がり、忘れ難いすばら

しい一夜でした。また、10周年の歩みを記録したカラー写真をも刷り込んだ、手作りの立派な記念誌「わんどのかい」を完成し、総会当日、出席者に配布されました。公務で忙しい身でありながら、このような企画を達成した松本会長はじめ、編集委員の尾形 正、片岡宥子、国分俊行、飯塚博栄諸氏のご努力とご苦勞を察しながら、記念誌を熟読しました。翌日は会津若松城などを案内していただいたことは望外の幸でした。時機を失しましたが、お礼かたがた10周年記念総会の一端を併せてご報告いたします。

末筆ながら、「わんどの会」のますますのご発展と会員各位の一層のご活躍をお祈り申し上げます。

関東支部（北冥会）第7回総会出席の報告

北冥会の総会が5年11月27日（土）に開かれ、中村信吾先生と共に出席する機会を与えられ同窓生の皆さんと楽しい一刻を過ごさせていただきました。

場所は、東京港区海岸（伊豆大島行の汽船の発着する近く）のニューピア竹芝4F、3Fでした。ここは竹芝棧橋と言われた地区ですが、その変貌ぶりにはびっくりしました。JR浜松町駅から見えていた浜離宮は高速道路やビルの陰になってしまっており、資本の大都市集中をまざまざと見せ付ける景観が続いています。

さて当日の様様をお知らせしなければなりません。大きく分けると、講演会、総会、懇親会になります。総会を除いたものをお知らせします。

なお当日は岡本辰夫、奥村実義、金須正幸の3特別会員が御出席になり、会合は盛況でした。3先生はともに大変お元気の模様で、その御健康を喜び懐かしの会話を楽しんでいる同窓会員の光景が各所で見られました。

同窓会ならではの情景と言うべきでしょうか。

1. 講演会（14:00～17:00）

中村先生…大学の現状と3学科の大講座制になってから4年を経過し、最初の卒業生を6年3月に送り出すこと。岩手大学を中心にした連合農学研究科（博士課程のみ）が'92—4月に発足し、これが刺激となって弘前大学の修士課程の志願者が増えてきている。国立大学で教養部を持つ大学では大学改革を進める上で、教養部の廃止か廃止を含む大学・学部の改革を要請される時代にある事。弘前大学農学部では他学部からの教官受入れを含めて学科・講座を編成し環境学部を発展する計画を7年度要求する事になっている事などが紹介されました。また、魅力ある地方大学にするための努力を続けねばならないことにも触れられました。

この他、ご専門の牛乳について、学科の違う同窓生にも理解しやすくユーモアのある講演がありました。

篠邊からは、32年に弘前へ来てからの、学部、学科の変遷・自分の仕事を長々と内容の余り無い話を致しました。

2. 同窓会総会：

3. 懇親会 (17:15~19:30)

講演が終わってから、同じビル内3Fのレストラン、ザ・ガーデンに場所を移し、懇親会が開かれました。洒落た、この様な建物が地方にも出来てこないのか？ やっぱり資本の集積力の違いです。

会場はビル3Fなのに天井はとてとても高く、会合のグループ毎にフロアーの高さが少し違うようで、間仕切りはなく観葉植物等で仕切られており空間利用のうまさを感じました。

懇親会は最初はちょっと、畏まった感じでしたが入るものが入り、飲むべきものが落ちてきてからは、他の会合から苦情が出るのでは？ というくらいに盛り上がりました。初冬にしては暖かなせいもあってビールはうまく料理の味もなかなかでした。

宴はなかなか尽きかねるものですが、そこは大都会。予約時間切れで、それぞれが二次会へと弾んだようです。かく言う小生も。

関東支部の総会に出席したのは61年以來ですが、暖かい受入れに感謝しております。会員の中には当日、早めに出てきたの、弘前のつもりが抜け切らずビルが皆同じに見えてきて、見つけて会場に着いたら時間ぎれの少し(同窓会員の名誉のために敢えて付け加えますが10min× α 前着だが、懇親会は堪能出来たとのこと)前であったという方もおられます。この弘前気質は大切に。大都会人に焦ってならないのが弘大農学部人。

中村先生ともども心から感謝しあげると共に同窓会のますますの発展を祈ります。

なお、篠邊から一言：現役最後の年に、関東支部総会に参加させる機会を与えて下さった事に対し、心から御礼を申し上げます。

皆様の、ご健康と益々の活躍を期待しております。

有難うございました。

篠邊三郎記

H-6-2-6 (命を感じた日です)

西北五支部総会開催

平成6年2月18日五所川原市『蝶屋』に於いて西北五支部総会が、悪天候の中参加者40数名、大学からは村山成治先生と工藤明が参加し、盛大に行われました。

斎藤貞昭支部長(S40年卒)の挨拶に続き、福士有一前幹事(S48年卒)より次回本部同窓会総会を西北五支部で担当するよう本部事務局より依頼があったことを報告し、支部会員

一同本日以上の卒業生を集めていただくよう是非協力してほしい旨発言があった。

その後、同じ職場の仲間や数年来会ったことが無かった同窓生が酒を酌み交わし、平成7年に行われます本部同窓会総会の成功を祈念しつつ盛会裡に総会を終了致しました。司会の石田雄一幹事(S48年卒)ご苦労さまでした。(A.K記)

— 訃 報 —

弘前大学名誉教授 中山林三郎先生は平成5年4月11日に逝去されました。

昭和32年作物卒業元三戸地方農林事務所長 萬田伝三郎さんは平成6年4月2日に逝去されました。昭和45年作物卒業、佐藤エージェンシー株式会社勤務の細田禮三さんは平成5年9月3日に逝去されました。

心から御冥福をお祈り申し上げます。